つた」（同）といふ発言にもなってゆくのであるが、それは、約言すれば、虚子の配合が、心持、情を俳句化するために必要な方法として示されているということになる。

以上、碧梧桐の「配合論」と、それと対立的位置にあった虚子の配合に対する考え方をも眺めて来たのであるが、碧梧桐の配合論が「あるものゝ美的趣味を助くる為めに、他のものを附け添へる」という美意識に基いた〃もの〃と〃もの〃との取り合わせ論であり、したがって許六の取り合わせ論を援用しているのに対し、虚子は「しつくりと感じの調和するものを配合して其心持を補け合ふ」という情感を重んじた配合を説いたということであり、このことは虚子が碧梧桐の引いた許六を評して「配合に重きを置いた人」「題に執着しないで、何でも配合物を見出して来て、其を其題にくつゝけさへすればいゝ、といふやうな極端な説を主張し」（「俳句の作りやう」三　ぢつと眺め入る事」大3・3・1日「ホトトギス」）た人とし、虚子自らは去来を挙げ「配合などには重きを置かず或題の趣に深く〳〵考へ入つて、執着に執着を重ねて、其題の意味―趣味―の中核を捕へて来ねば止まぬといふ句作法を取つたやうであ」（同）ると対古人の理解に於て述べていることからも明らかなように、碧梧桐と虚子の配合論の違いを通しても、両者の広義の文学に対する異質性を――それは一面本来的であり、一面意識的になされたものを含めて――物語るものであろう。

註

① この頃の子規の容体について碧梧桐は「今更こと〳〵しく申上ぐる迄もなく候へ共、日一日、月一月と其痛みの度を増し来り候今の容体は実に悲痛此上もなき事に有之候。」（「消息」明34・12・15日「ホトトギス」）と記している。

② 碧梧桐は「明治三十四年の俳句界」の中で、子規の「予は殆ど三十四年の俳句界に応接せず」の言葉を記し、「俳会常に根岸に開かれし時は論戦の間相互の意志疎通するものありしも、根岸の句会廃せられて以来、各自其好む所に偏して其統一を欠くに到りき。」と述べている。

③ 碧梧桐の第二次旅中伊予宇和島滞在中の記事。同四十三年十一月には玉島に於て碧梧桐は「無中心論」を唱える。

④ 子規と虚子との話し合いが「配合」と題した文章となつて明治三十四年四月の「ホトトギス」に出た。これを碧梧桐は見て「一読して『何だつまらぬ』と思つた。それは句が配合で生きると考へたことは自分達のヒヨコ時代のことであつて、今更そこへ戻るのは片腹痛いという感じを抱いたからであつた。」（「子規と虚子」松井利彦「俳句」昭36・1）と述べている。

⑤ 子規自選句集　明35・4　俳書堂刊。

⑥ 虚子は明治四十一年十月からはじめた「ホトトギス」雑詠選も明治四十二年七月で中断、小説に力を注ぎ「俳諧師」（明41・2〜7）「続俳諧師」（明42・1〜6）「朝鮮」（明44・6〜8）等を書いている。

⑦ 明治四十五年七月「ホトトギス」に雑詠選を再興、大正二年、自ら「守旧派」と称し「海辺より」ホトトギス　大2・3）て新傾向に対立する態度を明らかにした。

○「句は極めて簡単な句であつても、其背後に潜んでゐる作者の主観に、広いもの、深いもの、強いものがあれば其句には強大な力がある。」「句は万斛の憂を胸に蔵して僅に一言を洩したやうなものであり度い。」（「俳句入門」力強い句、大1・9・1日「ホトトギス」）

○「一見平浅と思はるゝ芭蕉の句にも尚ほ湿潤せる主観の力を認めない訳にはゆかぬ。」「子規居士の句は上手な句では無いが背部に潜んだ力がある。」（「俳句入門」芭蕉の句子規居士の句、大1・9・1日「ホトトギス」）

○「平明の句には連想を呼び易く、晦渋の句には連想を呼びにくい。」「単純の句には連想を伴ひ易く、複雑の句には連想を伴ひにくい。」「唯平明、単純なるが故によいのでは無い。其が容易に連想を伴ふが故によいのである。余韻の深い句といふのは斯ういふのをいふのである。」（「俳句入門」余韻のある句、大1・9・1日「ホトトギス」）

といった言葉からも窺うことができるのであり、要するに俳句に余韻・余情を重んずる立場に立っていたことが知られるのである。

虚子が配合について自己の考えを明らかにするのは、大正二年五月から同年十月にかけて「ホトトギス」に連載した「六ケ月間俳句講義」の中であり、それは「配合といふのは何でも彼でも取り合せればいゝといふので無」く「しつくりと感じの調和するものを配合して其心持を補け合ふ場合に必要なの」だとし、

草臥て宿かる頃や藤の花　　芭蕉

の句をあげて、「此句は『藤の花』を主にして作つた句」でも『『藤の花』は全く副物（そへもの）で、『草臥て宿かる頃』の旅情を主として歌つたもの」でもなく、「寧ろ主客が分たれぬ位に抱合しあつ」た句であるとし、「旅人が草臥れて宿をからうとする時の淋しい、併し乍ら静かなゆとりのある心持と、藤の花の美しい、併しながら静かな淋しい心持」「とが恰も互に其心を説明しあつてゐるやうに調和してゐる」、と説明する。また、反対の配合についても触れ、「草臥て」の句のように「全然しつくりと溶け合うてしまうやうに調和するので無く、一見全く反対の性質のものであるに拘らず其を配合すると互に其情を助け合つてゐるやうなもの」を言うのであると述べる。

このことは、子規の句

山吹に一閑張の机かな

の評にもあらわれ、「山吹」と「一閑張」を「たゞ訳も無く」「取り合せた訳では無く、久しい間其二つのものを見てゐるうちに山吹と一閑張の机との間に何か或生命のやうなものを見出して、之を取合して一句とすることが自然の仰（ママ）へ難い命令であるかのやうに考へ」て成ったもので、「居士の主張した写生・配合・客観描写といふ事を此一句は同時に而も極端に持つてゐ」るとし「此句を詰らぬといふ人は居士の此句を為すに至つた心持に同情を持ち得ぬ人のことであります。」「此句の奥底に潜んでゐる居士の感情の波の音を聞き得ぬ人といふ事であります。」（「六ケ月間俳句講義」六　俳句略史　大2・10・5日「ホトトギス」）と述べ「斯ふいふ句は居士の生前には居士以外の人の句にも大分見ることが出来」たが「居士歿後には跡を絶

のものを附け添へること」、つまりはこの天然界から「美ならしめる部分」のみを摘出してこれを取り合わせること、言葉をかえて言えば「醜を美化する想化の手段」の一つということになり、ここに於いて〃もの〃と〃もの〃とを取り合わせる配合の方法と、それに関する考え方が必須のものとなると言うことができよう。

次に、終生、碧梧桐のライバルとして俳壇にあった虚子の配合論を眺めてみると、虚子は大正二年三月に「暫くぶりの句作」と題する一文を「ホトトギス」に発表する。

これは[6]一時俳句界から遠ざかっていた虚子が再び[7]俳句界に復帰した折りに書いたもので、この中で虚子は「梅に鶯といふ配合は陳腐の代表者のやうに言はれてをる。俳句の季題の時雨も、最早題目其ものの陳腐な感じを一派の人の頭には呼び起こす程のものになつて居る。」「けれども梅に鶯でも、其作者の情味に新しいところさへあれば決(ママ)して一概に陳腐な配合と言つてしまふことは出来ぬ」「材料や形式で新陳を論じようとする人は俗人である。」「仮りにも詩人としては、陳腐な材料のうちに常に新味を見出さねばならぬ。」「外形が極めて陳腐であつて而も奥底に新味の潜んでゐる句を作つて見ようと考へ入つた。」と述べ、

南天に実太し鳥の嘴に　　虚子

の句について、「大きい長い鳥の嘴に南天の実を一粒啄んだ刹那の描写である。」「小さい南天の実が其鳥の嘴にはさまれた瞬間に大きく見えるところに一個の『動』がある。事件の動で無くて感情の動がある。」と感情の動きを強調し、「此句は其動を生命としてをる。小鳥に南天の実の配合はこれも陳腐の極といふべきであろう」が「余は敢て此句を陳腐だとは信じないのである。」とする。つまり、虚子は二つのものの配合がたとえ陳腐であつても底に流れる情味、即ち感情が深いものであればよいという考えを明らかにするのである。

この感情を重んずる考えは

積む萱も大破の屋根も時雨けり　　虚子

の句に対しては「唯触目の事実を描いたといふに過ぎな」い、「其事実が如何なる情調を余の心に喚起したか、其が句の上に力強く現はれて居らぬ事は欠点とせねばならぬ。」という反省のことばとなり、また

白梅に日かげる時の寒さかな　　虚子

の句について、「日の当つてゐる間は流石に春々しい心持がしてゐたが一旦かげると同時に、俄に色が靖めたやうに寒くなるのを言つた」ものである。これは「白梅に日のかげりたる寒さかな」と比べて「『日のかげりたる』といふだけでは客観の色が濃くなるが、『かげる時』といふと主観の湿ひが多くなる。」「『何が寒いと言つたとて、あの白梅に当つてゐた日が俄にかげつた時程寒く感ずることは無い』といふ位の強さを持つてをる。」と「主観の湿ひ」という言葉で、感情の尊重を説くこととともなる。

虚子のこのような感情を重んずる考え方は、別に

のではない。」「画の写生と写真と異なる点は、仮令へば同じ景色に対しても、其景色を美ならしめる部分のみを書いて、其醜なる部分を省き去る処である。即ち景色を想化した点である。」「写生といふとも、其醜を美化する想化の手段は必ず用ひられて居る。是が写生の真意義である。」とし、「俳句の写生も亦其意義の外に出ない」と説いている。

このことは、「人事は多く非美術的混淆物がある。之を排き之を脱して其美術的分子のみを発見するのでなくては、到底俳句をなさぬ」（「叙景の心得」、『続俳句初歩』明36・7月　新声社）とする考えにもつながるものである。つまり碧梧桐は「景色を叙する、山川草木の形状を叙述するといふことが、句作の重なるものになつて居る」（同）とし、「景色の主要なる部分を（即、中心点）摘出して之を一句に纏むべし」（同）とするのであり、人事を非美術的の混淆物が多いとしてこれを避け、景色の中から美なるもののみをとり出して写すという考えを持っていたことがわかる。

ここで、参考までに碧梧桐の〃美〃に関わる発言を列挙してみると、

○「天然の景色にしても亦人事にしても其事物の直写は、文学に尤も忌み嫌ふ理屈を交へる事が出来ない。」「即ち客観的俳句は先づ理屈を脱する審美の第一門を人に教へるものである。」（「主観客観」、『俳句初歩』明35・12・20日　新声社）

○「要するに切字は一種の形式である。」「自己が便利とする方法によつて差支ない。たゞ其方法の美の約束を忘れないのを要件とするだけである。」（「切字」、『俳句初歩』明35・12・20日新声社）

○「音調は美の約束を離れざるかぎり、前後の調和を忘れざる限り、面白く我が歌はんとするところの事物を言ひ現せばよいのである。」（「音調論」、『俳句初歩』明35・12・20日　新声社）

○「古人の美化し、諷詠した事物は已に吾々に其事物の趣味を教へてをる。」「詩は創作でなければならぬ。」「古人の糟粕を嘗めて何処に創作の功があらうか。」「新事物の材料には古人がない。」「吾始めてそを美化するのである。」（「新事物の諷詠」明38・7・10日　『新俳句研究談』明40・10・10日　大学館）

○「物を美化するのは詩賦の約束である。」「一見醜悪の如きもの〻中に善美を見出すは詩人の働きである事は云ふ迄もない。」「俳句の特長とも見るべきものは他の文学の詩的材料として一顧の値ひもないとする、日常触目の物を採って優に其趣味を発揮して居ることである。」（「夏の俳句」明38・7・20日『新俳句研究談』明40・10・10日　大学館）

といったもので、これらの発言によって碧梧桐の俳論が自然物の形状叙述を中心とした〃美〃を基準として論じられたものであることが窺えよう。

このことから碧梧桐が説く配合は、景色を美ならしめる部分のみを書いて、其醜なる部分を省き去る。」（「理想と写生」、『俳句初歩』明35・12・20日　新声社）という美を基準とする取捨撰択という写生論に基いたものであり、「あるもの〻美的趣味を助くる為めに、他

花を添へる手段」であるとする。そして、この同趣向の配合は「尤も普通なもの」で「尤も配合の当を得易い手段ではないかと思はれる」とも述べる。

次に、(六)の異趣味の配合については、「反対趣味」でも「同趣味」でもない配合で「趣味上顕著な相違もなければ類似のないもの」を配合する場合で、

山里は万歳遅し梅の花　　芭蕉
武士の露はらひ行く弓弭かな　　蕪村

のように「梅と万歳と山里」、「露と武士と弓弭」などといった配合、あるいは

平家なり太平記には月を見ず　　其角
門の雪樒ありやと問はれけり　　同

のように「月といふ題に平家物語、太平記などを思ひよせることは容易く人の模し得るところではない」、また「雪といふ題に樒とは又た不思議な配合ではあるまいか」「これらは反対でも同趣味の配合でもない、異趣味の配合の単り演舞を檀にする壇上である。」と述べ、反対の配合と同趣味の配合が「配合らしい配合」で「何処にか坊主の坊主臭いところがある」のに対し、この異趣味の配合は「其臭味を脱却する配合」であるとし、「多くの場合に於て趣味の発達しない人は顕著な配合を喜び、多少進歩した者は不顕著な部分を嗜む。」「予は一概に反対と同趣向の配合を卻けるものではな」く「つゞまるところ面白き配合が最も面白いのである。」と述べる。そして最後に許六の取合せ論「師（芭蕉の云く、発句は畢竟取合せ物と思ひ得るべし。二つ取合せてよし。とりあはすを上手と云へり。難有教云々」を引用してこの論を結んでいる。

この碧梧桐の配合論は先にあげた四十三年に「続一日一信」（明43・9・16日記事「日本及日本人」）中で述べた配合論、すなわち「古人も『発句は取合せものなり』などいうてをる、如何なる配合が美を成すかは明らかに説明出来ぬけれども、隠約の間に我等の頭を支配する不言の方則がある。其方則は雑然漠然とした自然界の現象の中から、美を形づくる要素として古人の発見したものである。」とも結びつくものである。

では、このような碧梧桐の『配合論』はどのような碧梧桐の俳句観に即して生まれたものであろうか。

碧梧桐は『俳句初歩』（明35・12・20日　新声社）の中の「理想と写生」の項で「理想とは其眼前に現はれて居ない事物なり景色なりを脳中に画く事」であるとし、「写生とは其眼前に現はれて居る事物なり景色なりを成るべく其実を失はぬやうに写す事であ」るといい、理想は「脳の働きの無限なる人があるならば、理想の天地程広いものはない。」写生は「題を得て其句を作る」場合でも「若し我が眼前にないものであれば其物のあるべき、場所に至つて其実を写すべきである。」「実を写すといふことは、其取材の領分甚だ窮屈なやうであるけれ共、其実到処に変化があつて」「無尽蔵な感じのする処、殆ど理想の天地の広さに下らぬ思ひである」とする。写生と写真の違いに触れて、「写生といふことに就いては多く其の意味を誤り伝へられて居る。決して絶対に有りの侭を写さねばならぬといふ

ある。」と評している。

この二例からも碧梧桐が作品を鑑賞する立場にあっても配合という点に留意していたことが窺える。

このような碧梧桐の配合についての関心の深まりが『俳句初歩』（明35・12・20日　新声社）を書くにあたって「配合論」の一項を加えさせることとなったのであろう。

では、碧梧桐の配合論とはどのようなものであろうか。『俳句初歩』中の「配合論」にしたがって眺めてみたいと思う。

まず碧梧桐は〃配合〃とは一句を形づくる場合において「二つ以上の事物を風詠することがある、其事物のあるものに対する他のものを其配合といふのである。」とし、「あるものゝ美的趣味を助くる為めに、他のものを附け添へるのである。」とも述べ、また配合は「一句を賑はすもの」、「複雑ならしめるもの」、「平板単純を避けしむるもの」であり、「配合を求めやうと特に注意しないでも、大抵の句が自然に配合を要求して、作者の注意しない間に配合の美の約束を踏んで居るやうなことがある。」ただ「其配合の妙否」が問題であると説く。そこで、碧梧桐は配合を（甲）無配合の場合、（乙）有配合の場合の二つに分ける。

まず（甲）の無配合とは「物それ自身のみを風詠した時」であるとし、

なつかしき枝のさけめや梅の花　　其角

二本の梅に遅速を愛すかな　　蕪村

のように「単なる梅の花許りを風詠して居」るもの、あるいは

やがて死ぬ気色は見えず蝉の声　　芭蕉

稲妻やきのふは東けふは西　　其角

のように「蝉」「稲妻」ばかりを風詠するものであるとする。

これに対し（乙）の有配合の場合は、これをさらに(イ)反対趣味の配合、(ロ)同趣味の配合、(ハ)異趣味の配合の三つに区分する。まず、(イ)の反対趣味の配合については「趣味の正反対な物を捕へて之を風詠する」もので、「強いものに弱いもの」といった「全く趣味の方向を異にしたものを配合するもの」であるとし、

雪の日や船頭殿の顔の色　　其角

狼のあと踏けすや浜千鳥　　千那

のように「雪の白き中に船頭の顔の黒き」を見、「千鳥のやさしきに狼の物凄さ」を配するといったもので、いずれも「往々にして理屈に陥り易い」ものであるとし、作句にあたって「理屈的配合と趣味的配合の境をよく咀嚼して居ないと」「直ちに失敗に帰す」配合であるとする。

(ロ)の同趣味の配合については「剛には剛、柔には柔」というように「それ〴〵相似たものを配するもの」で、

猪のともに吹かるゝ野分かな　　芭蕉

閻王の口や牡丹を吐かんとす　　蕪村

をあげ、「野分の強く吹きすさむに猪の荒れたるさま」、「牡丹の花の人眼を眩耀する華美に閻魔大王の口を配したる」「いづれも面白き同趣向の配合である。」とし、このような同趣向の配合は「ある物に他のものを添へて、其趣向を助けしむる」ものであり、「錦上

述べており、碧梧桐の俳論の中でも重要な位置を占めるものであると考えられる。

そこで、本稿ではこの碧梧桐の配合論に焦点を合わせ考察するとともに、これを大正期に入って虚子が唱えた配合論とどのように異なるものであるかを眺めてみたいと思う。

碧梧桐が配合の必要性を悟るに至った事情を窺うことができるものとして「髪」の題で句作した折りのことを記した一文がある。すなわち、「『日本』の週報に髪といふ題が出て居」(「『髪』の題」明34・12・15日「ホトトギス」)り、「これを作つて見やうと思つて、先づ一寸何心なく考へて見たところが、何といふことなく直に

山茶花や髪結ふ日なた……

といふ上五中七が出来た。が、下五が上が出来た具合にすらりと出て来ない。」(同)そこで「しばらく『山茶花に髪結ふ日南』と吟じて見る。どうも下がつかぬ。」(同)

「之を

山茶花に髪結ふて居る日南かな

と言つては、もう陳腐で平凡で何の面白味もない。且又予はかういふ句は近来大嫌ひになつた。」(同)そこでさらに

山茶花や髪結ふ日南母じや人

山茶花や髪結ふ日南嬉しけれ

……

等ができた。「娘の気になつたり、年寄の心になつたりさま〳〵変化してもどうも落着かぬ。つければつける程追々まづくなつて来る。是は日南に拘泥して山茶花以外に物を見まいとするから窮屈なのであらう。何か他の配合物を持つて来たらどうであらうと気がついた。」(同)いうもので、つまり、碧梧桐は実作という体験を通して「山茶花」という季題一つにとらわれた句作方法では「陳腐で平凡で何の面白味もない」(同)句しか得られないことを知り、その結果配合[4]の必要性を悟ったというのである。

翌三十五年六月から十月にかけて碧梧桐は「ホトトギス」に子規生前に刊行された句集である『獺祭[6]書屋俳句帖抄上巻』を鑑賞批評した文章、「獺祭書屋俳句帖抄上巻」を書き、子規の句を鑑賞する中で、配合に触れ、

紫の灯東京ともしけり春の宵　　子規

の句について「東京の夜の美しさを現はした句で、花天月地とか金燭銀屏とかさも美しさうな文句沢山の常套を避けて、単に『紫の灯を』と言ひ了せたところがこの句の魂である。」「たゞ紫の灯といふたばかりではそれ程美しい感じはしないが、『紫の灯をともしけり春の宵』といふと、それが何となく生き〳〵と美しう感ぜられて来る。」「つまり春の宵と紫の灯との配合が其処を得て居るからであらう。」と評し、また、

温泉の町に紅梅早き宿屋かな　　子規

の句についても「紅梅との配合上温泉町がよくきいて居る。それは温泉町といへば何処か暖かな家屋もちやァんとして居る感じがするが、そこが白梅よりも暖かい美麗な感じのする紅梅に適する所以で

二つの配合論

――碧梧桐と虚子――

栗田靖

1

明治三十四年の俳句界を評して正岡子規は「近来の流行俳句に慊焉たるものなり。」「俳句の出づるもの悉く同類同巣同醜、一見嘔吐を催さんとす。」（「明治三十四年の俳句界」明35・1・1日「ホトトギス」碧梧桐記）と述べるが、碧梧桐はこれを補足し、「三十四年の俳句界は、三十三年の俳句界に比して盛んなりしといふべきか、果た衰へたりしといふべきか、予は寧ろ之を乱れたりといふの至当なるを見る。」（同）とする。そして、俳句界の乱れた唯一の原因として子規の「宿痾」[1]をあげ、『日本』新聞は俳句界の羅針盤なりき。諸の舟子皆之に依て其方向帰着を定む。而して[2]一時其羅針盤を失ひしは本年俳句界の一大事にあらざりしか。」「斯くの如く乱れたる俳句界は明治三十五年に入つて如何に変化せんとするか、紛糾錯綜益々其乱を来すべきか、抑も他方一生面を開いて着々順道に帰すべきか刮目して其趨く所を見んと欲す。」（同）と述べ、俳句界の前途が多難であることを示している。

この年、九月十八日、俳句界の羅針盤とも言われた子規はこの世を去るのであるが、十二月に至って碧梧桐は『俳句初歩』（明35・12・20日　新声社）を刊行する。

碧梧桐はこの中で「たゞ予が今日迄経験し来つた作句上の履歴の一端に過ぎない。」「自分で感じもし又た覚つたと思ふこともあれば、先輩に導かれて成程と合点のいつたことも少くない。それらの端々を記してさうして予より後に俳句を始めやうといふ人に見せたら、俳句を作る上に何の功力はなくとも、俳句を読む上位に多少の参考ともならうかと思ふ」（「㈠俳句と作法書」、『俳句初歩』）と謙虚に述べているが、乱れた俳句界にあって碧梧桐自らがその羅針盤たらんとして刊行したものであるといふことは当然予想される。

さて、碧梧桐はこの書で「模倣と創意」「理想と写生」「主観客観」等の項目とともに、「配合論」の一項を加えている。

この配合論については、碧梧桐が明治四十三年新傾向運動を進める[3]旅中でも触れ「配合といふことは従来句作上に重んぜられた一要項である」「新傾向の立脚地はこゝに在ることを明言してもよい。」（「続一日一信」明43・9・16日記事「日本及日本人」、のち『新傾向句の研究』大4・6・5日　籾山書店刊に「配合論」として所収）と